



バルザックにおけるグローバルとは

沖 久 真 鈴

成城大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学
(受理：2019年1月5日 採択：2019年2月10日)

要 旨

19世紀のパリに、フランスで初めて動物園が誕生した。ナポレオンの海外遠征における戦利品として、あるいは外交の贈答品として動物が大量にパリに流入し動物園は拡大発展した。同時期に、人間もまたパリに流入していた。国内外から人が集まり人口は爆発的に増加した。方言や外国語がコミュニケーションをはばみ、見知らぬ者たちのひしめき合う都市となった。異国から集められた動物たちを檻ごしに見つめる、異国から集まってきた人間たち。小説家バルザックは動物と人間の流れを、動物比喩を用いて人間を描くという方法で自らの小説の中で合流させた。『ゴリオ爺さん』を例にみながらバルザックがどのように世界を把握しようとしていたか考察する。

キーワード：バルザック、動物比喩、博物学、越境

はじめに

1841年アメリカの作家エドガー・アラン・ポー（1809-1849）は史上初の推理小説とも称される作品『モルグ街の殺人』を発表した。物語の舞台は18××年のパリとなっており1区モルグ街のアパートで起きた猟奇的な殺人事件を、卓越した観察力と分析力を持つC・オーギュスト・デュパンが解決するという短編小説である。殺されたのはアパートの一室に住む母と娘の二人で、部屋はめちゃくちゃに荒らされている。すべての引き出しが開かれ物色のあとがあるが、奇妙なことに金品は盗られていない。娘は首に黒い圧迫痕があり、顔面が引っ掻き傷だらけで暖炉の煙突に逆立ち状態で詰め込まれているのを発見された。母親は首をかき切られ、胴体から頭部が取れかかった状態で見つかった。頭皮からは髪の毛がむしりとられ、全身が打撲していた。これだけの被害をもたらすことができるのは、複数犯によるものか大型の鈍器を振り回すことができる怪力の男性だと推測された。事件の夜、悲鳴と言い争うような声を聞いた近所の住人たちが、その声について証言する。

以下、デュパンが証言を整理したものだ――

フランス人は、スペイン人の声だろうと言いながら、もしスペイン語を知っていたら、いくらか単語が分かったかもしれないという。オランダ人はフランス人の声だが、フランス語は分からないから、通訳を介して証言したとも伝えられる。イギリス人はドイツ人の声だというのに、ドイツ語が分からない。スペイン人は、イギリス人の声だと自信たっぷりだが英語を知らないから音調で判断しただけだ。イタリア人はロシア人の声だと言いつつ、ロシア人と話したことはない。第二のフランス人など、第一のフランス人とも違って、あれはイタリア人のはずだという。その言葉を知らないが音調で分かったといっただけなのはスペイン人と同じだね。こんな証言が出てくるとは、さぞかし変わった声だったのだろうよ。その音声だけ考えても、ヨーロッパ五大国の人間が、いずれも異質だとみなしている¹⁾。

それもそのはず、結論を言ってしまうと、犯人は脱走したオランウータンだったのである。東インド諸島へ航海した船乗りの男がボルネオ島に行った際、森でオランウータンを捕まえてパリの自宅に連れて帰ってきたのだ。毎日男が剃刀で髭を剃っているのを見ていたのだろう、ある夜、オランウータンは剃刀を持ち、顔を泡だらけにして髭剃りの真似をした。男が遊ぶのを止めるようにと鞭をふったことに怯え、興奮して窓から逃げてしまったのだ。そしてモルグ街のアパートの一室に忍び込んだが、今度はその親子に叫び声をあげられ、動物は興奮と、恐怖と、怒りで、剃刀を振り回しながら暴れまわってしまった、というわけである。デュパンは犯人を確定する際、フランスの博物学者、キュヴィエ²⁾の博物学の本に触れている。堂々たる体格、非情な筋力、運動能力、凶暴性、模倣する習性、茶褐色の毛、などその本に書かれたオランウータンの特徴を確認したのだ。このオランウータンは、事件の後、パリのジャルダン・デ・プラント動植物園に引き取られ、物語は終わる。

作家、エドガー・アラン・ポーは、なぜ動物を犯人にしたのだろうか。犯人の声を聞いた証言者たちの引用を読めばわかるように、19世紀のパリにはさまざまな人種がひしめいていた。外国やフランスの地方からも人が集まり、人口が爆発的に増えていた。お互いの身分も、出身も、言葉も分からない状況である。その入り乱れた人間社会に動物が入りこんだとしても不思議はないかもしれない。犯人が動物ということも考えられる。もはや動物を組み込むことなしに、世界は把握できない時代になった、ということだろうか。

いち早く、人間と動物を二重構造にして世界を描こうとしたのが、フランスの作家、オノレ・ド・バルザック (1799-1850) である。彼は、人間と人間社会をありのままに、綿密に描きだそうとし、生涯に 89 編もの小説を書き、2000 人もの登場人物を生み出した。バルザックは人間を描く際、たびたび動物の比喩を用いている。たとえば 1835 年に刊行された『ゴリオ爺さん』をみると、32 種類もの動物が比喩として登場する。まるで小説空間が動物園であるかのようだ。ではなぜ、バルザックが動物を用いて人間を描く、

というスタイルに行き着いたのだろうか。バルザックはどのような時代の流れを受け、どのように世界を把握しようとしていたのか。

1. フランスにおける動物の歴史

王や皇帝や貴族が楽しみのために珍しい動物を収集して飼育するという事は紀元前から行われていた。メソポタミア文明には鳩飼育の記録があるし、古代エジプトでは、首輪をつけたレイヨウやヤギがナイル西岸のサッカラにある紀元前 2500 年の王墓の壁画に描かれている。古代ギリシアのポリスにも、動物飼育所があり、アリストテレスの自然誌的記述はそこでの観察がもとになっている。食用や労働力としてではなく、「趣味」として私的に動物をコレクションすることは権力者が古くから行ってきたことである。フランスのルイ 16 世も例外ではない。ヴェルサイユ宮には美しい鳥や、ゾウ、サイといった哺乳類からクロコダイルなどの爬虫類まで様々な動物が飼育されていた。しかし 1789 年フランス革命が勃発すると、ヴェルサイユ宮の動物たちは民衆の手に渡った。あるものは食用に、あるものは革製品にするため殺されてしまったが、ルイ 16 世の「動物は殺さないでほしい」という懇願を受け、1794 年ジャルダン・デ・プラントパリ王立植物園がヴェルサイユ宮の最後の生き残りを引き受け収容し、一般公開をした。これが動物園の始まりである。その後、ナポレオンが 1796 年にイタリア遠征を行い、イタリアから押収した動物たちを戦利品としてフランスに持ち帰った。1798 年のエジプト遠征の際には博物学者を大勢同行させたため、新種の発見もあり、フランス本土には生息しない動物たちを持ち帰った。そのため動物の増えたジャルダン・デ・プラント動物園では獣舎の建設が相次いだ。1802 年にはレジオン・ドヌール勲章の十字型を模したグランド・ロトンダと呼ばれる草食動物用の獣舎が造られ、1818 年には肉食獣のための獣舎が、1825 年には猛禽類用のケージが建設された。こうして動物園の敷地は拡大していき、動物はそれぞれの種や属に分類され、人々に展示されるようになった³⁾。

とくに人々が熱狂したのは、キリンの上陸である。1826 年、オスマン帝国のムハンマド・アリーが、フランス国王に就任したばかりのシャルル 10 世に一頭のキリンを贈った。このキリンは舟で運ばれ、10 月にマルセイユに到着したが、アフリカ育ちの動物がパリの寒さに耐えうるかが心配され、翌年の春までマルセイユに留め置かれた。そして 4 月から、衛兵、荷車、馬車などを伴って行列を成し 2 か月かけ、ゆっくりと歩いてパリに向かった。途中の沿道や町の広場では、頸の長い珍しい動物を一目見ようと、黒山の人だかりができたという。パリに到着し、ジャルダン・デ・プラント動物園のグランド・ロトンダに収容されると、キリンを見ようと、その年の夏だけでも 60 万人もの見物客が動物園を訪れた⁴⁾。キリンは人々の話題の種になり、版画によって図像が流通したため、詩や洋服、髪型、おもちゃ、その他ありとあらゆるオブジェのデザインに題材を与えた。パリじゅうの公共の場所にキリンの形を模したガス灯を設置する案も政治の場で大真面目に議論された。またキリンに限らず動物は、19 世紀当時の絵画や彫刻にも多大な影響を与えた。

とりわけ画家ウージェーヌ・ドラクロワ (1798-1863) はジャルダン・デ・プラント動物園へ足しげく通っていたことが彼の日記や書簡から分かる⁵⁾。間近で動物の動きを観察し、ときには解剖にも立ち会い、筋肉や骨格の構造まで研究したことによって、生き生きとした躍動感のある作品が大量に生まれた。1828年ごろからドラクロワはライオンやトラなどの猛獣を突如大量に描き始め、その数400点に及ぶ。それまでのような神話のモチーフとしてではなく、また貴族の邸宅に飾るための美しい装飾品としてでもなく、動物そのものの野生性やダイナミズムが追及されたのだ。

研究においても、博物学的知識が豊富になり、1830年には高名な博物学者、キュヴィエとジョフロワ＝サン・ティレル⁶⁾が生物の進化をめぐる大論争を引き起こし、世間を賑わせた。国内、各国からパリに集まってきた動物たちは、これほどまでに人々の関心を集め、熱狂させたのである。こうした現象は、野生動物の観察や愛好のグローバリゼーション、越境の始まりと言ってよいだろう。

さて、動物園が拡大したのと同時期、パリという都市も拡大していた。19世紀になってパリの人口は爆発的に増加し、1801年には54万6856人であったのが、1831年には78万5666人に、1851年には105万3261人まで膨張した⁷⁾。アメリカの都市社会学者リチャード・セネットの言葉をかりれば、「19世紀のパリは見知らぬ者たちの創り出す風景」となったのだ⁸⁾。エドガー・アラン・ポーの『モルグ街の殺人』に描かれていた通りである。方言や外国語がコミュニケーションを阻んだため、人々はそのフラストレーションを解消すべく、言葉を介さずに相手の顔の特徴から内面を知る学問「観相学」を求め、これが流行した。その一派に「動物観相学」というものがある。これは、動物と人間を比較し、たとえばその人の外見や行動の特徴が、ある動物に似ているとしたら、その人の内面もその動物と類似する、と考えるものだ⁹⁾。

このように、動物がパリに流入するのと並行して、人間もパリに流入した。この大きな二つの流れは動物と人間を対峙させ比較する、という一本の文化として合流したのだ。そして作家バルザックは、新聞連載小説家として、人々の関心が何に向いているのかに敏感であったこともあり、自らの小説の中でたくさんの動物を用いながら人間を描いたのだ。これは、野生動物の観察や愛好のグローバリゼーション、越境、からそのグローカリゼーション、地域的変容、内在化が始まったとも言える。パリという都市が動物園化する、つまり動物を観察し分類するように人間を観察し分類することが起きているからである。

2. 動物園的小説『ゴリオ爺さん』

では、そうしたグローカリゼーションが見て取れるバルザックの小説『ゴリオ爺さん』(*Le Père Goriot*) を具体的に見てみよう。バルザックはどのように動物を用いているだろうか¹⁰⁾。

この作品は1834年に『ルヴュ・ド・パリ』誌に連載がはじまり、翌35年に刊行された、新聞連載小説である。物語の舞台は時代を少し遡った1819年の王政復古期に設定されて

いる。革命により身分制度が崩壊し、身分関係なく野心があればの上がれる時代でもあり、しかしまだ貴族への憧れもあり、その最後の華やきも残っているという時代だ。パリの貧しいヴォケー館に住む学生ラスティニャックがパリで出世しようと、社交家、金融社会、犯罪社会などに接点を持ちながら、さまざまな人間の在り方と社会の広さ、深さを読者に見せてくれるパノラマ的な作品である。この作品にはきわめて動物の比喩が多い。まるで動物たちが物語空間を動き回っているようであり、当時拡大発展していた動物園の構造と重ねて読むことができるのではないか。そもそも『ゴリオ爺さん』の献辞は、ナポレオンのエジプト遠征にも同行し、キュヴィエと生物の進化論で争った博物学者ジョフロワ＝サン・ティレールにあてられている――

偉大にして高名なジョフロワ＝サン・ティレールに捧げる その業績と天才に対する感嘆のしるしとして ド・バルザック¹¹⁾

物語冒頭、ヴォケー館の住人たちは、それぞれが動物にたとえられながら何階のどの部屋に住んでいるのかが紹介される。まるで、何の動物がどの檻に収容され展示されているのか、動物園の地図を見せられているような感覚を抱く。以下に、登場人物ごとにとえられている動物種を示す。ヴォケー館の住人を住んでいる階ごとに示し、ヴォケー館以外に住む人物たちを「その他」としてまとめた。

「ヴォケー館」

4階・ラスティニャック：渡り鳥／翼をもがれた鳥／山猫／狼／ライオン／鷲／うなぎ
／犬／蛇／豚／蜘蛛)

・ゴリオ：鳩／鷲／カタツムリ／古鼠／犬(4)／子犬／狼／虎／ラバ／獣／牙

・ミシヨノー嬢：セミ／蝙蝠／毒蛇

3階・ポワレ：七面鳥／ロバ／小鳥／犬

・ヴォートラン：スフィンクス(3)／熊／山雀／若鶏／野良猫／ライオン(2)／爪

2階・ヴォケー夫人：オウム／鼠／カササギ／ヤマウズラ／牛／雌猫

・タイユフェール嬢：山鳩

1階・ヴォケー館の会食者たち：家畜／ヒキガエル

「その他」

・レストー伯爵夫人：うなぎ／純潔馬／蝶々

・ニュシンゲン男爵夫人：燕／夜泣き鷲／シャコ／子猫

・ボーセアン夫人：駿馬

・ボーセアン邸の従僕たち：ロバ

・社交界の女性たち：乗り継ぎ馬

- ・ラスティニャックの田舎の召使いアガト：カササギ
- ・ラスティニャックの妹ロール：燕

この表をふまえて、主要登場人物の紹介をしておきたい。パリで最も貧しい界限にある下宿屋ヴォケー館の主人は2階に住むヴォケー夫人だ。彼女はオウムの嘴のように大きな鼻をしている。おしゃべりで噂好き、そして財産を持っていそうな男性の下宿人がいると媚びを売って言い寄る様子が、光るものを巣に持ち帰る習性がある鳥、カササギにたとえられている。ヴォケー館の住人は彼女を含め7人だ。それぞれ、身分も出身もさまざまだが、訳あり、ということだけは共通している。主要な登場人物は、次の三人だ。4階に住む学生ラスティニャックは、パリで出世しようと田舎から出てきたばかりで金も地位もない、しかし若さと行動力のある様子が渡り鳥にたとえられる。また彼が社交界で自分を引き上げてくれる年上の女性を得ようと奮闘する野心は肉食獣や猛禽類にもたとえられている。おなじく4階の住人ゴリオ爺さんは、かつて事業で成功したブルジョワである。しかし二人の娘のさらなるステップアップを願い貴族と大銀行家に嫁がせるため、持参金を用意したり、嫁がせた後は彼女たちの生活援助のため、自らは儉約してヴォケー館で惨めな生活をしている父親である。娘たちへ献身的に尽くす姿はしばしば犬にたとえられる。3階の住人ヴォートランは刑務所から脱獄した徒刑囚である。変装しヴォケー館に身を潜めている。パリで出世しようとするラスティニャックの野心を見込み、真面目に勉強して労働するより、金持ちの娘と結婚して財産を相続する方が生涯年収が高いのだと説く。自分が貴族の娘の兄を殺してやるので、その娘と結婚して遺産を相続し、自分に手数料として20パーセントをよこすよう誘惑する。

次に、ヴォケー館に充満する「匂い」の描写を見てみよう――

この部屋は何とも言えない「下宿屋の匂い」とでも呼ぶしかない匂いを発している。(…) 若いのも年取ったのも下宿人全員が放っている独特な (*sui générés*) カタル性発散物のむかつくような成分を分析する方法がもし発明されたら、この匂いも描写できるようになるかもしれない¹²⁾。

ここでわざわざラテン語で表記されている「独特な」と訳される *sui générés* は *générique* の語源であり、生物のジャンル、属性や類を表す単語である。あえてラテン語の博物学的なこの語を用いることでヴォケー館がより動物園的空間であることが強調されている。ヴォケー館の1階は食堂になっており、住人だけでなく食事をしに来る会食者たちも集う空間になっている。その会食者の一人に、ジャルダン・デ・プラントの博物館員がいる。この男は、4階の住人ゴリオのことを次のように言う――

(ゴリオは) 快樂に溺れすぎて、カタツムリ (*colimaçon*) みたいな生物、人間の形を

した軟体動物になった。分類 (classer) するなら「着帽類」(Casquettifères) ってところだろう、と夕食に通っている常連の一人で、博物館に勤めている男が言うのだった¹³⁾。

ゴリオが帽子を被っていることに由来してのことだろう、バルザックの造語、着帽類という語を使ってゴリオを一、生物種として分類している。冒頭からつづくこれらの記述により、ヴォケー館が、動物園的空間であり、住人たちは動物であり、ヴォケー館に充満する何とも言えない匂いは、動物園のそれであるように読者にすりこまれていく。さらに、登場人物の行動や習慣が動物的に描かれている様子を見てみよう。作中で合計4回、犬にたとえられているゴリオ爺さんはパンを食べる前にその匂いを嗅ぐのが習慣である——

「鼻で味が分かるの？匂いを嗅いで [flairer] いたじゃありませんか。とヴォケー夫人は言った。「大変な儉約家だからそのうち台所の匂いを嗅いだ [flairer] だけでお腹がふくれるようになるでしょうね¹⁴⁾。」

かつて製麺業で財を成したゴリオは、小麦の匂いを嗅ぐのが習慣となっているのだが、娘たちへの献身の忠実さや、それによってみずほらしく惨めになり下がった様子がしばしば犬にたとえられることから、このしぐさにも読者は無意識のうちに犬を想起してしまうだろう。また、3階に住むヴォートランの描写はどうだろうか——

肩幅が広く、上体がよく発達し、隆々たる筋肉の持ち主で、分厚い角ばった手の節々には、燃えるような赤毛がふさふさと生い茂っていた¹⁵⁾。

まるで博物誌のライオンの項目を読んでいるかのようである。普段は脱獄徒刑囚の身分を偽り、鳥のように歌を口ずさみ陽気な人物を演出しているが、その外見には屈強で危険な内面がにじみ出ている。物語後半、ヴォートランは3階に住むポワレという犬にたとえられる人物と、4階に住むミシヨノー嬢という蝙蝠にたとえられる人物二人に脱獄徒刑囚であることがばれ警察に密告されてしまう。警察がヴォケー館に踏み込み、ヴォートランを逮捕しようとした場面の描写を見てみよう——

血が彼の頭にのぼり、その目は野良猫 (chat sauvage) の眼のように光った。思わず飛び上がったその勢いにはあまりにも凶暴なエネルギーがみなぎり、あまりに凄声で吠えた (rugit) ので、下宿人たちはそろって恐怖の叫びをあげた。ライオン (lion) のようなその動作を見て警官たちはポケットからピストルを取り出した¹⁶⁾。

ついに隠していた肉食獣としての本性が露わになった瞬間だ。ネコ科の動物にたとえら

れ、ヴォートランの動きの素早さやしなやかさが一瞬にしてイメージできる。また吠える、という動物的な語も使われ、まさにライオンそのものであるかのようだ。彼を警察に密告したポワレは、警察の指示に忠実に動く様子が犬にたとえられ、同じ下宿屋で暮らす仲間を装いながらヴォートランを裏切るミシヨノー嬢が、鼠の仲間か、鳥の仲間か曖昧である蝙蝠にたとえられているのも面白い。

4階のラスティニャックは、パリで出世しようと、レストー伯爵夫人やボーセアン夫人といった富裕層と親交を深めようとする。彼女たちは蝶々や駿馬にたとえられ贅沢の香りをまとっている。ラスティニャックは上流貴族の住むサン＝ジェルマン地区、成金ブルジョワの多いショセ＝ダンタン地区、そして下宿のある貧しいサン＝マルセル地区を鳥のように大きく移動しながら、それぞれの世界を観察し物語を繋いでいく。華やかな世界から再びパリで最下層地域にあるヴォケー館に戻ると、正反対の光景が繰り広げられており、その落差に幻滅してしまう――

ヌーヴ＝サント＝ジュヌヴィエーヴ街に着くと、彼は急いで自分の部屋に上がり、降りてきて御者に10フラン与えてから、あの胸くその悪くなるような食堂へ入っていった。そこに彼は、まぐさ棚に向かった家畜みたいに、しきりに餌を食んでいる18人の会食者たちを認めた¹⁷⁾。

ヴォケー館の家畜たちはちょうど、餌の時間なのである。この会食者たちが、食事の際に酒に酔って騒ぐ場面を見てみよう――

あっという間にボルドーワインが一周し、皆が活気づき、陽気さが増した。すさまじい笑い声がとどろき、その中で色んな動物の鳴き声の物まねが響いた。(…) あっという間に頭も割れんばかりの喧騒と化し、ちんぷんかんぷんな会話、文字通りのオペラが繰り広げられた¹⁸⁾。

会食者たちはみな、家畜のように食事をし、その空間には、もはや人間の言語ではない動物の鳴き声が飛び交う。まるで動物園の動物たちが餌の時間になると一斉に騒ぎ出す喧騒のようである。そして、まるで動物園の動物のように描かれたヴォケー館の住人たちが、しばしば散歩に出かける先は、皮肉なことに、まさにパリ動物園、ジャルダン・デ・プラントなのである。動物に例えられる登場人物たちがジャルダン・デ・プラントのベンチに座って語りあう様子は、なんとも滑稽である。

物語の最後はゴリオ爺さんも死に、ヴォートランも警察に逮捕され、青年ラスティニャックはさまざまな人間模様と社会の在り方を目の当たりにする。そしてゴリオを埋葬した後、ペールラシェーズ墓地の高台から一人パリの街を鳥のように見下ろし、「次は俺とお前の対決だ」と、人間社会に戦いを挑んで終わる。

以上のように『ゴリオ爺さん』という作品の中には動物比喩だけでなく動物的要素が非常に多く盛り込まれ、ヴォケー館、ひいては物語空間全体が動物園的空間となっているのである。『ゴリオ爺さん』が執筆された1834年～1835年、ジャルダン・デ・プラントにはすでにキリンも入っており、いちじるしく動物の種類や数が増えていた。猛禽類舎、肉食獣舎、猿園、ベアピットと呼ばれる熊のケージなどが建設され、動物を、種や属に分類して檻に入れ、展示する方法が確立された時代なのだ。ここの統括者ジョフロワ＝サン・ティレールへの献辞に始まる『ゴリオ爺さん』と動物園とは、その構造が似ている。人間の社会をありのままに描き出そうとしたバルザックは『ゴリオ爺さん』の冒頭で、ヴォケー館を「このような人間の集まりは、小規模ながらも、完全な社会を形作るすべての要素を提示するはずで、事実提示していた¹⁹⁾」と言っている。動物比喩をふんだんに用いて描いたヴォケー館が社会の縮図であるならば、パリというさまざまな出自の人間が集まる社会は、巨大な動物園であると言えよう。

3. 動物比喩にはパターンがある

さて、『ゴリオ爺さん』における動物比喩のリストを見てみると、その数の多さが目につくが、バルザックの使う動物比喩は大きく三つのパターンに分類できると思われる。一つは、典型的なラ・フォンテーヌ寓話からのイメージの踏襲である。たとえば、狼やキツネは貪欲、ハトは仲の良い夫婦や愛情の象徴、ライオンは百獣の王、ロバは愚鈍、犬は忠実、猿はずる賢い、といったイメージは、古くはイソップの『動物寓話』や中世の『狐物語』などを経て、17世紀ラ・フォンテーヌの『寓話集』によって決定的に人々に叩き込まれたものである。ラ・フォンテーヌの『寓話集』は19世紀フランスで異常なまでの人気を得て、1811年から1825年までベストセラーの一位であった。その後も四位以下には下がらなかった。バルザック自身、出版業を手掛けた際、一攫千金を狙ってその最初の刊行本に選んだのもラ・フォンテーヌ全集であった。さらにバルザックは多くの作品にたびたびラ・フォンテーヌの寓話を引用しており、影響を大いに受けていると言える。たとえば、ゴリオ爺さんが仲の良かった亡き妻からプレゼントにもらった銀食器には、つがいのハトが彫られており、娘たちへの父性愛にあふれたゴリオの顔にかかる前髪は、ハトの羽の形をしている。そして娘のため、自らをも省みず献身的に尽くす姿は、忠実な犬に重なる。脱獄徒刑囚の身分を隠しヴォケー館に暮らしているヴォートルランを警察に売り渡し、ヴォケー館の住人たちから裏切り者、と罵倒されるミシヨノー嬢は鼠なのか鳥なのか、曖昧な存在である蝙蝠にたとえられている。ラ・フォンテーヌ寓話の中で、常に百獣の王として描かれるライオンは、やはり登場人物の、権力や雄々しさ、勇気を示すために用いられる。たとえば『金色の眼の娘』(La Fille aux yeux d'or)の主人公、アンリ・ド・マルセーを見てみよう――

アンリは、生命にあふれた若々しさと、水のように澄んだ眼の背後に、ライオンのよ

うな勇氣と猿のような巧妙さを持っていた²⁰⁾。

美貌でどんな女性も手に入れられる自信がある彼の勇氣や自信の高さがライオンにたとえられている。このようにおなじみの誰にでも分かりやすいイメージを使って、読者に一瞬で訴えかけ無意識的に受け入れさせている。

二つ目のパターンに、バルザックは動物の習性や特徴といった博物学的要素を利用している。たとえば、2階に住むヴォケー夫人はカササギにたとえられているが、カササギには光るものを収集し巢に持ち帰る習性があることから、ゴリオの持ち物を盗み見て、彼にどのくらいの年取があるのかを確かめようとするヴォケー夫人のあざとさを示すのに使われている。またおしゃべりで嗜好きのヴォケー夫人に嘴の大きな鳥であるオウムを用いたり、3階に住むポワレのひょろりとした長い首という外見的特徴をあらわすために七面鳥が使われている。また鳥の鳴き声も、登場人物の気分の浮き沈みを表すのに利用される。ヴォケー館2階に住むタイユフェール嬢は、父親に認知されない哀れな娘だが、彼女のどことなく寂し気で悲し気な声は、低音で落ち着いた鳴き声が特徴の山鳩にたとえられる。一方、『ゴリオ爺さん』が完成した年の末から『ルヴェ・ド・パリ』誌に連載がはじまった『谷間の百合』(*Le Lys dans la vallée*)においては、モルソー夫人が明るく楽し気に話す声色が、ツバメにたとえられる。ツバメの鳴き声は高音で、「キキキキ」「ケラケラケラ」と笑っているように聞こえ忙しく楽し気で活気がある²¹⁾。4階のラスティニャックやゴリオにあてられているワシは、鳥の中でも高所に住み、鋭い視力で一気に獲物に襲いかかる習性がある。これを使って、かつてゴリオが、小麦粉の相場変動を予想して売り買いをし、事業を成功させていた様子を眼のいいワシであらわしたり、ラスティニャックの抱くボーセアン夫人を自分のものにしたいという野心的な心境を、獲物に狙いを定め巢に持ち帰ろうとするワシに重ねている。ライオンに関していえば、『ランジェ侯爵夫人』(*La Duchesse de Langeais*)におけるモンリヴォー侯爵は、ワテルローの戦いやアフリカ探検で数々の危険をくぐり抜けてきた將軍だが、彼の容姿は次のように描写されている――

彼の大きい頑丈な頭のおもに目立った特徴は、ふさふさとした、黒いゆたかな髪の毛であった。これがまるでクレベール將軍を彷彿とさせるように、顔の周りを取り囲んでいたが、その精力的な額、横顔、落ち着き払った大胆な目つき、なんとなく狂暴にみえる激しい顔つきなどまでが、この將軍にそっくりであった。彼は小柄であったが、上半身が大きく、まるでライオンのように筋肉質であった。彼が歩いているときには、姿勢にも足取りにもちょっとした身振りまでに、なんとなく人を威嚇するようなゆるぎない力と何かしら高圧的なものが現れていた²²⁾。

ライオンの、たてがみや、上半身、筋肉、動き方、そのものを想起させる。『ゴリオ爺さん』におけるヴォートランも逮捕される場面ではライオンそのものになっていた。動物の種類

を細かく使い分け、その習性や特徴を登場人物の造形に用いているのだ。

三つ目のパターンに19世紀当時に流行していた「生理学もの」の影響がある。たとえばパリの人々を動物に見立てた戯画集『パリ博物館』のなかでは、熊は活字工、猿は植字工、鼠はオペラ座の練習生の踊り子、ヒョウは尻軽女、ライオンはオシャレに着飾る伊達男、雌ライオンはオシャレで乗馬に興じる女性をそれぞれ指している。こういった流行を小説に取り入れ『ゴリオ爺さん』の翌年に書かれた『幻滅』(*Illusions perdues*)においては、印刷業のセシャルは熊にたとえられており、同じ印刷所で働く植字工はやはり猿にたとえられている。ラ・フォンテーヌ寓話であれば、熊はお節介や、無知のイメージであり、猿はずる賢いイメージだが、ここではそのような意味では用いられていない。また主人公で詩人のリュシアンが着飾ってバルジユトン邸の晩餐へ出かけた場面では次のように描写されている――

リュシアンはライオン、と言っていい姿に変身していた。大変な美男子で見違えるように立派だともっばらの噂だったから、アングレーム上流社会の女たちは、皆ぜひまた会ってみたいものだと思っていた²³⁾。

ここでは、ライオンは主に洗練されたダンディーという意味で使われており、動物的な唸り声や筋肉を表現しているわけではないのだ。

いずれにせよ、バルザックは同じ動物でも、ある時はラ・フォンテーヌの典型的イメージで読者に一瞬で訴えかけ、ある時は博物学的に動物の生態を活かして、またある時は当時の「生理学もの」の流行を取り入れて、さまざまな意味レベルで動物比喩を使い分けているのである。時代はバルザックより後になるが、作家プルーストもたびたび鳥の比喩を用いることで知られている。『失われた時を求めて』では100回以上も鳥の比喩が使われているという。しかしプルーストは、「鳥」oiseau / oiseaux という語で表現するだけであり、博物学的に何の鳥であるか判別・分類することには無関心なのである。さらに、プルーストにおける鳥は女性像との結びつきが強く、また翼をもつものとして身分の高さや貴族性の表象として使われることが多いようだ²⁴⁾。バルザックは、「鳥」というだけでなく、カササギ、ワシ、ウグイス、ツバメなど種を判別して描き分ける。そして鳥＝貴族性のように、決まったイメージは用いず、伝統イメージの踏襲であったり、博物学的な知識であったり、19世紀の流行であったりとその時々でパターンを使い分けて表現するのである。多くの人間を描き分けるのに、それだけ多くの動物を必要としたのであり、その意味でやはり、バルザックの描く人間社会は動物園的なのである。

4. 世界は動物なしに語れるか

バルザックの博物学に対するアンテナは非常に高かった。1830年から博物学者キュヴィエとジョフロワ＝サン・ティレールとの間に起きた博物学的論争にも多大な関心を寄せ

た。キュヴィエが、動物は全く違ったプランで神によって創造されたのであり、動物に進化はなく、天変地異が繰り返されるたびに絶滅していくと説く一方で、ジョフロワ＝サン・ティレールは、全ての動物には共通のモデルがあり、おかれた環境によって変化し、進化すると説き激しく対立した。バルザックは、両者を第一級の天才と称賛ながらもジョフロワ＝サン・ティレールの説を支持した。この頃バルザックはジョフロワと手紙のやり取りをしており、彼の研究や学説に関して情報を得たり、意見を交換していた可能性が大いにある²⁵⁾。バルザックは1842年に自らの作品群に一貫する構想について述べた「人間喜劇総序」のなかでジョフロワの説に触れ、人間の「社会」を以下のように語っている――

論争が起こるよりもずっと前から、わたしはこの体系を研究し、この点において「社会」と「自然」とが似ていることを認めたのであった。社会もまた、人間が行動を展開するさまざまな環境に従って違う人間を作るのではないか²⁶⁾。

バルザックは「自然」と「社会」とが似ていると指摘したうえで、同時にその「差異」についても言及している――

動物の間にはほとんど全くドラマがなく混乱も起きない。動物は互いに相手に追い迫るが、それだけのこと。人間も同様に相手に追い迫るが、知性の多い少ないによってその闘争が複雑になり、動物とはわけがちがう²⁷⁾。

さらに――

自然界では多様な動物の間に境が出来ているのに、「社会」についてはそういう境をまったく度外視していいのである。(…)商人の妻が時には侯爵夫人にふさわしいこともあるし、侯爵夫人が時には芸術家の妻に値しないこともある。「社会的地位」には自然界ではありえないような偶然がある。なぜかといえば、それは「自然」に「社会」を加えたものだからである。したがって社会の「種」の記載は、両性を考えただけでも、少なくとも動物界の「種」に対して二倍になる計算である²⁸⁾。

つまり、人間は動物種にあるような境を超えて、転身するし、変化するということだ。単純に一人の人間を一動物種に対応させて語るだけでは、人間社会は描き切れないのだ。「自然」と「社会」を二重構造にして対比させたとき見えてくる、その「差異」の部分こそ、バルザックが情熱をかけて描き出そうとした人間特有のドラマなのだろう。そのために生み出したのが「人物再登場法」という手法ではないか。

「人間喜劇」の特徴である「人物再登場法」とは、同じ登場人物をさまざま小説に登場させ、人物を絆として自らのすべての小説を互いに結び合わせようとする手法である。同

じ人物の人生を少しずつ語っていくのではなく、あらかじめ登場人物たちの家系図や相関図を用意していたわけでもなく、個々の作品を書き進めるうちに作品全体を統一しようという構想が出来上がった。結果2千人以上の登場人物を作り出し、そのうちの574人が2つ以上の作品に登場し、中にはニュッシンゲン男爵のように31もの作品に顔を出す常連もいる。ある作品で突然過去が明らかになる人物もいれば、最初に登場した時よりもはるかに年を取って再び現れる人物もあり、また同じ時期の行動が別の作品で、別の視点から語られる人物もいる。それぞれの作品は、一つの物語として完結し、それだけでも十分に読む価値はあるのだが、「人物再登場法」を使うことで「人間喜劇」は個々の作品を超えて、時間的にも空間的にも開けた壮大な一つの世界のように感じられるのである。『ゴリオ爺さん』で学生だったラスティニャックも、この後の人間喜劇作品を読めば、金持ちの娘と結婚し伯爵となり、さらに政務次官を務め、二度も大臣に任命されるという出世を果たす様が見られる。彼の成長と人生を、長い目で追うことが出来るのは、「人物再登場法」のなせる業だ。

動物園の檻に入れられている動物たちは、種ごとに分類され、一生その境を超えることはない。キリンはキリンとして、ライオンとして一生を過ごす。しかし人間はどうだろうか。土地を移動し、種の境を超えて混じり合い、自らの意志と行動次第で成り上がったたり成り下がったりする。また、ヴォートランのように身分や国籍を偽ることもできる。人間はさまざまに属性を変える複雑性を持っているのだ。この動物種にはない人間の特異性を描き出すには、それだけ多くの動物種を用いる必要があったのだろう。動物を作品に言えば使うほど、人間の複雑性、多様性が際立つ。19世紀の人間社会ドラマを描き出そうとしたバルザックの試みにおいて、動物はなくてはならない要素であると言える。

おわりに

エドガー・アラン・ポーの『モルグ街の殺人』で、犯人の声を証言したのはフランス人、オランダ人、イギリス人、スペイン人、イタリア人、ロシア人であった。それぞれがあれは自分の国の言語ではなかったと言い、予想はするものの、その言語も喋れないので音調で判断しただけだ、と言う。これが19世紀のパリの姿だったのだろう。見知らぬ者同士が共生する世界である。そして犯人はボルネオ島から来たオランウータンである。見知らぬ者たちの中に動物が混ざってもおかしくはないのだ。オランウータンはジャルダン・デ・プラントに収容されて終わるが、実際に、ジャルダン・デ・プラントから狼が脱走した事件があった。1850年3月20日『イリュストラシオン』誌の記事によると、真夜中に銃と松明を持った男たちが狼を捜索し、追い詰められた狼は二人の警備員に噛みついて重傷を負わせたと報道している²⁹⁾。動物園の誕生と発展は、人間の文明社会と野生を対峙させたと同時に、人間社会に野生が越境して入り込んでくる恐怖をももたらしたのだろう。

19世紀初頭、動物が流入し動物園が拡大したのと並行して人間が流入し都市が拡大した。檻を隔てて動物と人間とが向かい合い、比較しあった時代の流れを受け、動物を分類

するように人間を分類する、というグローバリゼーションが始まったと言える。これがバルザックの小説世界で多彩な動物比喩を使って人間のタイプを描き分けるというかたちで拡大し、やがてそれがグローバリゼーション、再拡大越境して、世界の作家や愛好家に広まっていく。それ以後の小説家や文学研究者で、バルザックを知らないものはいない。もちろん、その後の読者が動物観察と人間観察が二重構造化になっていることをしっかり意識していたかいないのかは別にして、動物世界のように人間世界が成り立っており、動物世界内では動物は自分たちの住む世界を守り、越境することはないが、人間世界内では自分たちの住む世界が互いに越境し合うということは無意識のうちに引き受けていると言えるのではないだろうか。

注

- (1) エドガー・アラン・ポー著、小川高義訳、2006年、『黒猫／モルグ街の殺人』、光文社、170頁。
- (2) Baron Georges Léopold Chrétien Frédéric Dagobert Cuvier (1769-1832) フランスの博物学者、比較解剖学者、古生物学者。さまざまな深さの地層から掘出した化石の復元作業を行ない、古生物が時代によって異なるものから構成されることを明らかにした。しかしこれを複数回にわたる天変地異による絶滅と、その後の入れ替わりによるという、いわゆる「天変地異説」を唱え、進化によって生物の変化することを認めなかった。
- (3) ジャルダン・デ・プラント動植物園の地図を1803年、1828年、1838年と並べてみると拡大発展していった様子が一目瞭然である。地図の下半分はもともとあった王立植物園で上半分が動物園である。右部分の空き地になっていた部分が徐々に埋まっている。『ゴリオ爺さん』が執筆された1834年、35年ごろにはほぼ埋まっていたと思われる。以下の図を参照のこと：図1 (Le Muséum en 1803, par Gotthelf Fischer, Les animaux du Jardin des plantes Brève histoire de la ménagerie 1793-1934, muséum national d'histoire naturelle, imprimerie nationale, Paris, Gallimard, 1995)；図2 (Le Muséum en 1828, gravure en couleurs de E. Colin, Les animaux du Jardin des plantes Brève histoire de la ménagerie 1793-1934, muséum national d'histoire naturelle, imprimerie nationale, Paris, Gallimard, 1995)；図3 (Plan du Jardin des plantes en 1838, par Acarie-Baron, del. et sculp. Lith. p.58, Roissy, Album du Jardin des Plantes, p.58.)
- (3) Yves Laissus, Les animaux du Muséum Brève histoire de la ménagerie 1793-1934, muséum national d'histoire naturelle, imprimerie nationale, Paris, Gallimard, 1995. p.120.
- (4) Yves Laissus, Les animaux du Muséum Brève histoire de la ménagerie 1793-1934, muséum national d'histoire naturelle, imprimerie nationale, Paris, Gallimard, 1995. p.120.
- (5) G・ダルジャンティ G. Dargenty によって編纂されたドラクロワ回想録の一節を見ると、ドラクロワがどれほど熱心に動物を観察していたかが分かる。足しげくジャルダン・デ・プラントへ通い、一日中そこで過ごし特にトラやライオンが檻の中を行ったり来たりする様子を何時間も観察していたと言う。

« Il passait au Jardin des Plantes des journées entières, pendant lesquelles, observant les animaux dans toutes leurs postures, il se pénétrait de leurs mouvements, de leur galbe, cherchant la dominante de leur caractère [...]. Ce sont ces observations répétées, faites avec la sagacité, la conscience, la volonté et la suprême compréhension du génie, qui ont fait de Delacroix le premier de tous les animaliers. »

彼は何日間も、一日中、ジャルダン・デ・プラントで過ごし、その間動物たちのあらゆる姿勢を観察し、彼らの動き、曲線を自分のものにし、彼らの最も支配的特徴を探した。(…) 慧眼、熱心さ、意志、特性の最高度の理解をもって繰り返しなされた、こうした観察がドラクロワを最も優れた動物画家にした。

またドラクロワが友人であり動物彫刻家のバリーに送った手紙には動物園のライオンが死んだので解剖に立ち会うために急いで向かおうという内容がしたためられている。Eugène Delacroix à Barye, *Correspondance générale*, tome1, p.225.

« Le lion est mort. Au galop. Le temps qu'il fait doit nous activer. Je vous y attends. » ライオンが死んだ。大急ぎだ。天候がこうなのだから急がなければいけない。あなたをそこで待っている。

1841年の8月には動物学者のイジドール・ジョフロワ＝サン・ティレールに手紙を出し、動物たちの餌の時間に間近で動物を見せてくれるよう頼んでいる。

« Je désirerais vivement obtenir la permission de faire des études d'après les animaux de la ménagerie du jardin du roi, et à cette effet d'être introduit dans l'intérieur du bâtiment où ils sont gardés, à l'heure du repas. Je vous serais bien reconnaissant si vous étiez assez bon pour m'accorder cette faveur le plus tôt possible. »

王立植物園動物園の動物たちについて、研究させていただけますよう、そしてそのために、動物たちが守られている獣舎の内部に、餌の時間に入れますよう、その許可をどうしてもいただきたく存じます。そうしたご厚意はできるかぎり早急に私に認めいただけるほど寛大なお方ありますならば、深く感謝いたしたく存じます。

ドラクロワの日記⁵を見てみると、体調を崩した晩年まで、ジャルダン・デ・プラントへ通っていたことが記されている。

< jeudi 6 juin 1850 > « Passé la journée au Jardin des Plantes. »

ジャルダン・デ・プラントで一日をすごした。

< vendredi 7 mai 1852 >

« J'avais fait une séance le matin au Jardin des Plantes. J'y ai fait renouveler ma carte. Travaillé au soleil parmi la foule, d'après les lions. En arrivant, pris, dans le jardin, de la langueur, je me suis à dormir au soleil, sur une chaise. »

ジャルダン・デ・プラントで朝のうち仕事をした。そこで私の証明書を更新した。群集のなか太陽のもと、ライオンを描いた。園についたが疲れてしまい、衰弱から私は太陽のもと椅子で寝てしまった。

< 18 avril 1854 >

« J'ai été au Jardin des Plantes passer une heure à voir les animaux, mais ils étaient paresseux et ne

m'offraient pas grand-chose à étudier ; d'ailleurs, la chaleur était excessive. »

ジャルダン・デ・プラントに行って、動物を見るために一時間過ごした。しかし彼らは怠惰で私に研究すべきなことはたいして与えてくれなかった。しかも暑さが異常だった。

- (6) Étienne Geoffroy Saint-Hilaire (1772-1844) フランスの博物学者、比較解剖学者。動物界には共通した「構造の単一のプラン」があると説いた。フランス革命後、ヴェルサイユ宮で飼育されていた動物たちが王立植物園に移され、その際、植物園は国立自然史博物館として再編成された。併設された動物園も一般に公開された。ジョフロワ＝サン・ティレールはこの自然史博物館の初代館長に就任した。オスマン帝国からパリにキリンが贈られた際も、パリに到着するのが待ちきれず、マルセイユまでキリンを迎えに行った。
- (7) パリ市の人口は1801年には54万6856人だったが、1851年には105万3261人（併合される小郊外も含めれば127万7064人）にまで膨張した。北山研二著、2014年、「近代都市と管理される自然」、成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科編、シリーズ・ヨーロッパの文化1『ヨーロッパと自然』、96頁～116頁、成城大学。
- (8) ジュディス・ウェクスラー著、高山宏訳、1987年、『人間喜劇 19世紀パリの観相術とカリカチュア』、ありな書房、7頁。
- (9) スイスの神秘主義的観相学者ラファーター Johann Caspar Lavater (1741-1801) の『観相学』は大きな反響を呼び、ドイツ語から英語、フランス語へと訳された。1806年から1809年にはモロー・ド・ラ・サルト博士の編集で図解の多い4巻本の仏訳が試みられた。この本の副題は「人相の特徴から人間を知る方法 (*L'Art de connaître les hommes par la physionomie*)」である。1820年には750枚もの挿絵が付けられ10巻本の再版がなされたほどの人気であった。このうち9巻目が動物と人間のアナロジーについて語られた動物観相学の巻になっている。バルザックは1806年版か1820年版かのいずれかを所有し、自身の作中で言及しているわけだが、どの版本を持っていたのかは研究者によって諸説ある。
- (10) Honoré de Balzac, *Le Père Goriot*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol. 3. 1976.『ゴリオ爺さん』における考察は以下すべてこの版を使用した。
- (11) *Ibid.*, p.50.
- (12) *Ibid.*, p.53.
- (13) *Ibid.*, p.73.
- (14) *Ibid.*, p.92.
- (15) *Ibid.*, p.60.
- (16) *Ibid.*, p.218.
- (17) *Ibid.*, p.118.
- (18) *Ibid.*, p.202.
- (19) *Ibid.*, p.62.
- (20) Honoré de Balzac, *La Fille aux yeux d'or*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex,

Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol. 5. 1976. p.1057.

- (21) 鳥の鳴き声が聞けるサイト Les chants et les cris des oiseaux de France Cris et Chants des oiseaux- Plus de 100 enregistrements disponibles <http://www.webornitho.com/Chants.chant.cris.des.oiseaux.de.france.et.europe.htm>, 以下、鳥の鳴き声に関する考察は上記のサイトを参考にした。
- (22) Honoré de Balzac, *La Duchesse de Langeais*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol. 5. 1976. p.946 .
- (23) Honoré de Balzac, *Illusions perdues*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol. 5. 1976. p.826.
- (24) プルーストにおける鳥の研究に関しては、松田真理氏の論文、2015年、「プルースト作品における鳥の表象」、仏文研究 (46)、143頁～165頁、京都大学、と福田桃子氏のシンポジウム発表、2018年、「鳥たちのフランス文学」シンポジウム、「マルセル・プルーストの鳥類学」、於慶応義塾大学、を参考にさせていただいた。
- (25) バルザックはキュヴィエとジョフロワ＝サン・ティレールの「アカデミー論争」に大いに関心を抱き、『ゴリオ爺さん』の翌年に書かれた作品『幻滅』の2章にも「アカデミー論争」への言及がみられるほど。また1842年エツツェルの編集による『動物の私的・公的生活情景』という当代の作家たちがオムニバス形式で書いた動物を主人公にした物語集のなかでバルザックの「栄光を目指す動物たちのためのロバの手引き」という作品は、明らかにキュヴィエとジョフロワ＝サン・ティレールの「アカデミー論争」の風刺物語になっている。作中に当時の博物学界の実態が詳しく書き込まれていることから、バルザックの博物学への関心の高さがうかがえ、実際に論戦に立ち会っていたとも推測できる。また1832年の作品『ルイランベール』をジョフロワに贈呈したり、一緒に食事をしたりと親交もあったようだ。そのうえ、ナポレオンのエジプト遠征の際、同行したジョフロワ＝サン・ティレールによって「電気ナマズ」と「シビレエイ」という二種類の電気魚が発見され生きたまま捕獲されたが、バルザックは『娼婦盛衰記』(1838年)のなかで、誰もがその魅力にしばれてしまう娼婦エステルにあだ名を「シビレエイ」とし、早速自らの作品に取り入れている。
- (26) Honoré de Balzac, *Avant-propos à La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », vol.12. 1981, p.17.
- (27) *Ibid.*, p.17.
- (28) *Ibid.*, p.17.
- (29) Edmond Texier, 1852, *Tableau de Paris*, tome1, Paulin et Chevalier, Paris, p.186.

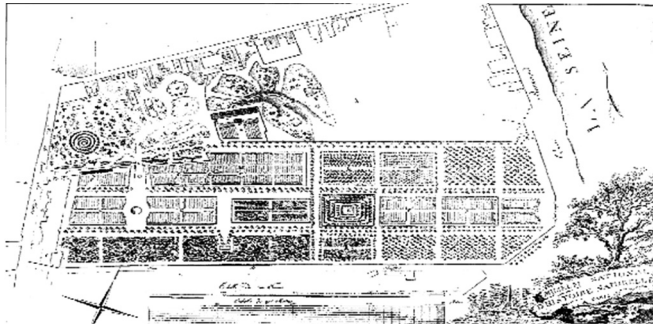


図 1

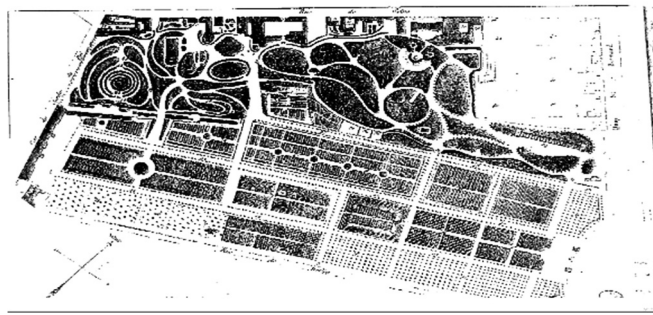


図 2

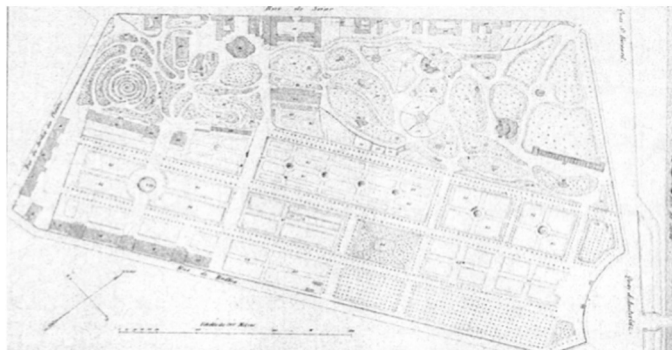


図 3

Multi-layered of animal-human encounters in 19th-century Paris —What is glocal in Balzac?

Marin OKIHISA

In 19th-century Paris, the first zoo in France was established. The zoo was expanded and developed because many animals were imported into Paris as trophies from Napoleon's overseas expeditions or as a diplomatic gifts. At the same time, people also flowed into Paris from inside and outside France, and the population increased greatly. Therefore, Paris became a crowded city of strangers, and different dialects and foreign languages disrupted communication between them. People from outside the country saw animals in cages collected from foreign countries. In his works, Balzac, a famous French novelist, adopted a way of describing humans figuratively as animals to overlap the global flow of animals with that of people. In this paper, I will analyze how Balzac tried to grasp this new world in his novel, "*Le Père Goriot*".